

CIIR

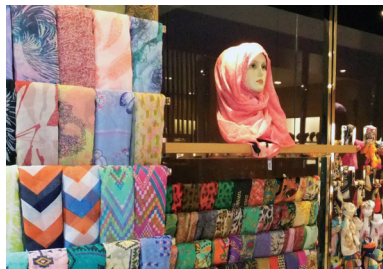
Center for Information on Religion

レポート

宗教情報センター
vol.1 2024.11

報告

ヴェールから考える イスラーム



講演

News

宗教情報データベースを公開

コラム

実はおもしろい！ 立川の宗教

宗教を 考えるための 第一歩



宗教はおもしろい

このたび私たちが運営しております宗教情報センター（CIR=Center for Information on Religion）は、特定の宗派や教団にとらわれずに、宗教に関する知識や情報を多くの方々にお伝えするために『CIR レポート』を発行することになりました。

現在、国内外で宗教に関連した様々な問題が浮かび上がっており、財産だけでなく命に関わることさえ起きています。しかし一方では、宗教に生きる意味や救いを求める人も決して少なくありません。こうした時代だからこそ、正確な情報に基づき宗教について深く考える必要があると思います。

『CIR レポート』では、宗教を研究している専門家の話をわかりやすくお伝えするとともに、研究者が国内外で出会った宗教にまつわる興味深い現象等も報告をいたします。こうした話や報告を通して、宗教に対する多様な見方や、宗教のもつ多様な面に接していただき、あらためて現在の宗教問題について考えてくださればありがたいと思っております。

CIRは、宗教法人真如苑の附置研究所として、1994年に創設され、これまで宗教の現在について、継続的で一貫性のある情報発信をしてまいりました。CIRは創立30周年となります。これを一つの機として、より多くの方々に私たちの活動を目にしていただきたいと思ひ、この冊子の創刊をいたした次第です。

宗教はいろいろな形で社会に貢献できると私たちは信じており、本年（2024年）2月に初めて「立川文化セミナー」を実施しました。『CIR レポート』もまた、私たちの活動の一つです。今後も多くの方々のご意見をうかがいながら、社会にとって意味のある宗教のあり方について探って参りたいと思います。何とぞよろしくお願い申し上げます。

目次 contents

講 演	宗教を考えるための第一歩	藤井 健志 ……	1
報 告	ヴェールから考えるイスラーム	荒木 亮 ……	24
News	宗教情報データベースを公開	……………	36
コラム	実はおもしろい！立川の宗教 金毘羅神社	……………	38

表紙写真 上：インドネシアのヴェール専門店（荒木 亮 撮影）
下：2024年立川諏訪神社初詣（藤井健志 撮影）

講演

宗教を考えるための第一歩

東京学芸大学名誉教授 藤井 健志

宗教情報センター（CIR）では、毎年宗教に関する講演会を「立川文化セミナー」として実施してまいります。以下の論稿は、2024年2月18日に立川商工会議所会議室で行われた第一回講演の記録です。

はじめに

本論に入る前に、いくつかお伝えしておきたいことがあります。第一に私の立場についてお話をしておきます。私は宗教学をやってきた人間です。研究の立場から日本人と宗教との関係をいろいろ考えてき



藤井健志（ふじい・たけし）
東京学芸大学名誉教授

1954年、東京都で生まれる。東京大学文学部宗教学科で宗教学を学ぶ。その後國學院大學日本文化研究所を経て、東京学芸大学に着任し、宗教社会学、日本宗教史を教える。図書館長、副学長を歴任し、現在は同大名誉教授。

ました。言い換えると、宗教をやってきた人間ではありません。つまり何かの宗教の信者ではありません。この「立川文化セミナー」は、真如苑の宗教情報センターが主催となっていますが、真如苑の信者でもありません。

ではなぜ、私が宗教を研究してきたかというと、私が心から尊敬している歴史学者の安丸良夫さんという人^{*1}が、「宗教がなければ死なないでもよかった人が世界に何百万人もいる。だからこそ私たちは宗教のメカニズムを研究しなければならない」とおっしゃったことに関係します。もっともこういう話をする、じゃあ宗教なんかないほうがいいでしょう、という人もたくさんいます。そういう考えはあってもよいのですが、私には賛成できません。なぜならば、日本にも世界にも宗教から生きる意味や幸せを得ている人たちが何億人もいるからです。その人たちを無視したり軽蔑したり、あるいは宗教を放棄するよう強制する権利は誰にもありません。それを前提として、宗教のもつメカニズムをいろいろな視点から研究しなければならないというのが私の考えです。

第二に、この「立川文化セミナー」というのは、立川にある宗教法人の真如苑が設置した宗教情報センター主催です。実は私は立川市民

なのですが、市内にある様々な宗教教団には、市民のため、社会のためいろいろな働いてもらいたいと思っています。そのため宗教情報センターのお手伝いをしているのですが、「立川文化セミナー」は特定の宗教に偏らず、宗教についての見方を深め、世界に存在する多くの宗教の意味と意義を考える場にしたいと考えています。ですからここでは、真如苑に限らず特定の宗教教団の利益になるお話は一切いたしません。

前置きが長くなってすみませんが、第三です。今日の話の中では「多くの日本人は」といった言い方を繰り返します。日本人という言葉で私が意味してるのは、国籍に関係なく日本語を母語としている人です。国籍は日本ではないけれど、日本語を母語としている人たちが日本には数十万人はいます。それから国籍は日本だけでも、日本語を母語としていない人たちもいます。このように国籍と母語とは微妙にズレています。言葉の問題をこのあとの話では重視しますので、日本人といったら日本語を母語とする人たちを指すと考えていただきたいと思います。

以上が前置きですが、ちょっとだけ付け加えておきますと、私は東京で生まれて、東京で育って、職場も東京だったので、私の宗教を見

*脚注

1. 安丸良夫（やすまる・よしお、1934～2016）日本近世・近代に関する歴史学者。著書に『安丸良夫集』第一巻（第六巻（岩波書店、2013年））などがあります。

なおこの論稿では、研究者が使う方法に基づいて、書名を「」でくくります。また出版社名と出版年を付記しました。

る目はどうしても東京という都市に住む人の目になりがちです。そういう見方は意識して排除したいとは思っていますが、もしかしたらちょっと影響があるかもしれません。

宗教を考える「第一歩」ですので、こうした前置きは必要だと思っていますが、少し長くなってしまいました。すみません。それでは本論に入りましょう。本日のテーマは次の二点です。その一は、おおかたの日本人の常識とは違って、多くの日本人は宗教と密接な関係をもっているということを示します。その二は、それにもかかわらず、多くの日本人が、自分たちは宗教に無関心、無関係、無頓着だと考えることができるのはなぜか、ということです。

一・多くの日本人と宗教との密接な関係

(1) 初詣によく行く日本人

宗教に関するすべての統計は、だいたい日本人の50%から60%は、毎年初詣や墓参りに行っていることを示しています。^{*2} コロナ禍の後も大きな変化はないと思います。

2. たとえば『現代日本人の意識構造「第九版」』（NHK出版、2020年）129頁～140頁。

今日は初詣についてお話しをしたいと思います。2009年までは、警察庁がその年の三が日に各社寺に初詣に行った人数を発表しており、それが新聞に載っていました。2009年を見ると、明治神宮（319万人）、成田山新勝寺（298万人）、川崎大師（296万人）です。^{*3} 初詣の参拝者の合計が9939万人だと警察庁は発表していました。私はこの数字は少し多過ぎるんじゃないかと思っていますが、いずれにしても、ものすごい数の日本人が初詣に行っていることは間違いないですね。

3. 「今年こそ 神頼み最多」『読売新聞』2009年1月9日。

宗教学者はよく比較の対象にするんですが、イスラム教徒はメッカに大巡礼に行きますね。^{*4} 聞いたことはあると思いますが、大体何人ぐらいの人が巡礼に集まるか、ご存知でしょうか？ 大体200万人ぐらいです。^{*5} つまり、さっき明治神宮だけでも300万人以上という話をしましたが、メッカに集まるイスラム教徒より多いです。明治神宮だけをとっても参拝客は多いのですが、日本全体を考えると、初詣に行く日本人のほうがはるかに多いということになります。

4. 1年に1回、決められた時期に行われるメッカへの巡礼。
5. 2024年の巡礼者の数は180万人と報道されています。

もっとも初詣は、例えば交通網の発達に深く関係しています。江戸時代のように電車がなければ、どうしてもあんなには集まりません。こうした事情はあるのですが、ただ初詣に行く日本人は、世界的にも

非常に多いということは、間違いありません。

初詣は、神社やお寺という宗教的な場所に行き、神様仏様に対して一年の幸せを祈願することです。立川の諏訪神社の初詣でも、皆さん熱心に拝んでいました。こういう意味では、立派な宗教的な行為だと思えます。つまり多くの日本人は、毎年かなり熱心に宗教的な行動をとっていて、宗教に深く関わっていることは否定できないと宗教学者としては思うんですね。

ところがそれにもかかわらず、統計を見ると、多くの日本人は宗教に関心をもっていないということになっています。けれどもおもしろいことに宗教を信じていないという人も初詣には行くのですね。⁶ここからは、宗教的行動をしているのにもかかわらず、自分たちは宗教に関心をもっていないと考えることができる仕組みが日本にはあると考えてよいのではないかと思います。宗教に関わっているのにもかかわらず、関わっていないと感じられる仕組みですね。これが第一のポイントです。

6. 2008年5月30日の「読売新聞」に掲載された統計では、「宗教を信じていない」と答えた人の74%が初詣に行き、77%が墓参りに行っているということです。

(2) 日本の宗教の隠れたルール

多くの日本人は宗教に無関心だから、宗教に対する態度もいい加減だったり、無頓着だという考え方があります。よく挙げられる例では、子供が産まれた時には神社に行き、結婚式はキリスト教の教会で行って、お葬式は仏教でやる。だから日本人は宗教にいい加減だといった話。皆さんも聞いたことがあるのではないのでしょうか。

でも本当にいい加減なのかな、というのが私の考えです。ちょっと違った角度から考えてみましょう。生まれた時はキリスト教の教会に行き、結婚式は仏教のお寺で行い、葬式は神社でやるという人はほとんどいないのではないのでしょうか。もしそういう方がここにいらしたら、あとでインタビューさせていただきたいと思うんですね。でも、お葬式はまだですね。でもほとんどいないと思います。

特に仏教式の結婚式をやりたくないという日本人が多いです。もちろん仏教式結婚式が悪いわけではないし、私も出たことがあります。しかし仏前結婚式は0.4%しか行われていないという統計結果もあります。⁷ 仏教式の結婚式は、他の方式に比べてはつきりと忌避され、嫌がられてると思ってよいと思います。

7. ゼクシィ結婚トレンド調査 2019（首都圏）（インターネットにおいて「ゼクシィ結婚トレンド調査」で検索すると出てきます）。

8. 「葬式と墓」『エコノミスト』89巻41号、2011年、33頁。

その一方で、神道のお葬式は少ない。仏教式の葬式は90%ぐらいあるけれども、神道式は3.4%だという数字も出ています*₈。

つまり仏教で結婚式はしないとか、神道でお葬式はしないというルールが実はあるんじゃないかと、私は考えています。よく考えてみると、神道、仏教、キリスト教の三つの宗教と、生まれた時、結婚式、葬式という三つの儀式との関係を、順列で考えると、図1のように組み合わせは6パターンできます。しかし多くの日本人が選んでいるのはAパターンのみで、他の組み合わせはほとんど見られません。ですからここには、皆に共通の行動を促している隠れたルールがあると言つてよいと思います。またこうしたルールがあるということは、実は日本人は宗教に対して無関心や無頓着ではないということを示していると考えています。

(3) 多くの日本人とキリスト教

次にアジアの国々におけるキリスト教徒の割合を考えてみたいと思います*₉。図2を見ると日本のキリスト教徒の割合は、わずか1%で非常に低い。世界で最もイスラム教徒が多いインドネシアや、ユダヤ教

徒の多いイスラエルに比べても、割合としては日本は低いです。信教の自由が認められているのにもかかわらず、キリスト教徒は増えないんですね。多くの日本人は宗教に対して寛容だと言われていますが、ここまで割合が低いと、むしろ非寛容なんじゃないかと思いたくなります。

いずれにしても日本には、キリスト教に入信することを抑制するブレーキがあるのではないかと思います。ブレーキがあるということは、宗教に対して何らかのこだわりがあるということで、日本人はそれほど宗教に対して無頓着ではないと考えられるのではないのでしょうか。

以上のように、多くの日本人は宗教的なことをかなり行っていて、宗教に対して無関係、無関心、無頓着ではない。宗教を意外に気にしていると言つてよいだろうと思っています。

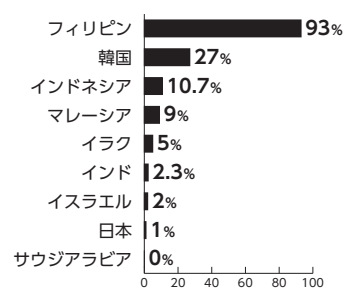


図2

9. 図2の数字は主として外務省サイト¹⁾に示された各国の基礎データに基づきました。ただしイラクに関しては現状の数字がわからないので、『最新アジア・オセアニア各国要覧』（外務省アジア局等・監修）東京書籍、1995年、158頁に基づいています。日本に関しては『宗教年鑑（令和4年版）』文化庁、2022年に基づきますが、少し修正しています。

	Aパターン	Bパターン	Cパターン	Dパターン	Eパターン	Fパターン
生まれた時	神道	神道	キリスト教	キリスト教	仏教	仏教
結婚式	キリスト教	仏教	神道	仏教	キリスト教	神道
お葬式	仏教	キリスト教	仏教	神道	神道	キリスト教

図1

二・宗教との密接な関係があるのにもかかわらず、 多くの日本人が自分たちは宗教に無関係・ 無関心・無頓着と考えられるのは、なぜか

この話をする前に皆さんの宗教についてのイメージを思い浮かべていただきたいのですが、プラスのものからマイナスのものまでいろいろあると思います。もちろん宗教に対するイメージには、何が正しくて、何が間違っているということはありません。私自身は、宗教に対してはプラスのイメージをもっているのですが、こうしたイメージは、それぞれの経験や知識によって形作られるものです。ですから知識のあるなしで宗教に対するイメージは変わるかもしれない。知っていればこんなイメージはもたなかったということもあるかもしれない。そこでこれまでいろいろな知識を蓄積してきた宗教学を通して、宗教について考えてみたいと思うのです。

(1) 「宗教」の日本語について

今日は「宗教とは何か」という定義の話はしません。定義以前の重要な問題があると思うからです。私たちは宗教について自由に考えたり、自由にイメージしているように思っているけれども、根本的なことを忘れていると私は考えています。

それは私たち、多くの日本人は、日本語を使って考えたりイメージしたりしているということです。私たちが宗教について考えようとする時は、日本語の「宗教」という言葉を使って考えざるを得ません。

以前には世界共通の宗教という概念があって、それが英語では religion と呼ばれ、日本語では宗教と呼ばれていると考えられていました。しかし1970年代以降、それは違うのではないかと考えられるようになりました。どこにでもある水といったものでも、英語の water と、日本語の水とは意味が少しズレているという研究もあります。¹⁰ 言葉はそれを使っている社会の文化や歴史を反映していて、私たちが何かを考える以前に、すでに何らかのイメージが付着していると考えられるようになりました。宗教という日本語も、私たちがそれを使って自由に考えられる無色透明な言葉ではない。そこにはすでに

10. 鈴木孝夫・著『ことばと文化』
岩波新書 1973年、34頁、
40頁。

ある程度、何らかのイメージが付着している、と考えています。

言葉を使って考えるということは、サングラスをかけて物を見るようなものだと思います。黄色のサングラスをかけると世の中は黄色に見えますが、それは世の中が黄色だということではありません。私たちに必要なのは、世界そのものが黄色なのではなくて、自分たちがかけているサングラスが黄色だから、世界が黄色に見えるのじゃないかと疑うことだと思います。

これと同じように、宗教という日本語に付着してるイメージを知ること、宗教の違うとらえ方があるかもしれない、と考えることが重要だと思います。私たちは、宗教はこういうものだと思い込んでいるけれども、これは言葉に付着してるイメージのせいじゃないか、言葉が元からもっているイメージによって、そう考えさせられているのじゃないかと、疑ってみることも必要だと思います。

例えば現代日本には「宗教は怖い」というイメージがあります。宗教についてのこのイメージは多くの日本人に共有されてると思います。ただこのイメージは見かけほど単純ではありません。怖いものとしての宗教には、多くの場合、伝統的なお寺や神社が入っていないのです。宗教は怖いと心から思ってる人はけっこうたくさんいますが、そ

ういう人たちは、宗教という言葉から勧誘活動を行う宗教教団をイメージしていることが多く、お寺とか神社を怖がっているかといえ、そうではないのです。私がとても重要だと思うのは、このような宗教という言葉のイメージです。

このように考えると、初詣や墓参りには行くのにもかわらず、自分たちは宗教に関心をもっていないと考える日本人が多いことがよくわかると思います。多くの日本人は、宗教＝勧誘活動を行う宗教教団という現代日本語のイメージに基づいて考えているのであって、伝統的な寺社を含む広い意味での宗教に無関心なわけではないと思います。もちろん私たちは宗教について自由に考えてよいのですが、私たちが考える以前に、宗教という日本語に付着しているイメージが、私たちの考えを誘導しているのではないかと考えます。これが宗教と密接な関係があるのにもかわらず、多くの日本人が自分たちは宗教に無関係・無関心・無頓着と考えることのできる一つの理由だと思います。

ではなぜ、日本語の宗教という言葉にこうしたイメージが付着したのでしょうか。宗教という日本語が広く使われるようになるのは明治初期です。それまでは宗教という日本語はほとんど使われていません

でした。明治に入ると、英語の religion などの翻訳語として宗教という言葉が使われ始めます。^{*11} このようにほとんどの日本人が知らなかった言葉だったために、多くの日本人になじみのあった伝統的なお寺や神社が、宗教という新しい日本語からはイメージされにくかったという事情がありました。むしろ新しく定着したキリスト教などをイメージさせる言葉として拡がっていきます。言い換えると、伝統社会とは切り離された宗教教団をイメージさせやすい言葉として使われるようになっていきます。

明治10年代に入ると、仏教も含む世界の諸宗教を表すことばとして使われ始めますが、そこには神社は宗教ではないとした戦前の日本の宗教政策も影響を与え、^{*12} 多くの日本人にとって、宗教という日本語はそれほど身近なものとはなりませんでした。

戦後になると、信教の自由が強調されるようになり、神社や大本教などの新しい宗教も、宗教として公認されるようになります。新しい宗教は「新興宗教」と呼ばれるようになりますが、その中には社会問題を起こした教団がいくつかあり、しばしば報道されたために宗教＝新興宗教のようなイメージが拡がっていきます。オウム真理教などのように、事件を起こした宗教教団が報道されることが多いので、新興

宗教、さらには宗教という言葉のイメージが次第に悪くなっていきま^{*13}した。

こうした言葉の歴史の中で、「宗教は怖い」というイメージが形成されてきたと私は考えています。研究者は新興宗教という言葉は使わずに、「新宗教」と呼ぶことが多いのですが、それは新しい宗教の中には優れた宗教教団も多いので、新興宗教という既にマイナスのイメージが付着した言葉を避けようとしているためです。

日本人が宗教について考えようとする時には、「宗教」という日本語を使わざるを得ないので、この言葉には発生の仕方からその後の使われ方まで、以上のような様々な歴史が絡^{から}んでおり、その結果として特有のイメージが付着しています。私は日本人が宗教について考えようとする時は、日本語の「宗教」という言葉がもつイメージを知っておく必要があると考えています。それは言い換えると、私たちは何を無意識の前提としているのかを考える必要があるということです。「宗教」という日本語に付着したイメージを考慮しないで宗教について考えようとする、私たちと伝統的なお寺や神社との関係は視野に入らず、偏った宗教理解が生まれてくる可能性が高いと私は思っています。その代表が、日本人は宗教に無関心だという思い込みです。

11. 鈴木修次・著『日本漢語と中国』中公新書、1981年、124頁～137頁。

12. 島蘭進・著『国家神道と日本人』岩波新書、2010年。

13. 『新宗教事典』弘文堂、1990年のI・2「新宗教の展開」などをご覧ください。

(2) 日本人と宗教との歴史的関係（ただしその一部）

以上のことは大変重要だと思っていますが、これだけですと先ほど申し上げた隠れたルールはよくわからないと思います。それを理解するためには、日本人と宗教（宗教という言葉ではなくて、仏教や神道などの実際の宗教）との歴史的関係を知る必要があります。お話しできるのはその一部ですが、次の漫画（図3）を見てください。かつての私の愛読書だった『美味しんぼ』の一節です。¹⁴ここでは山岡という新聞記者が、元日に「なんまんだぶ（南無阿弥陀仏）」という念仏を唱えて、「縁起が悪い」とたしなめられるシーンです。

私はこの話を非常に気に入っているのですが、実はこれとよく似た話が、鎌倉時代の仏教説話集の『沙石集』¹⁵にあります。両者に共通するのは、正月に仏教の念仏を唱えて、怒られるということです。ではなぜ、正月と念仏の組み合わせはよくないと考えられるのでしょうか。

歴史を見ると、平安時代の末ぐらいから、仏教式の葬式が定着し始めます。¹⁶ 仏教が縁起が悪いという感覚は、このお葬式を始めたということにかなり深く関わっているだろうと考えます。仏教が葬式や、人の死をイメージさせるものになっていくということです。

14. 雁屋哲・作、花咲アキラ・画『美味しんぼ』第41巻、小学館、1993年、180頁。

15. 『沙石集』（無住・著）岩波文庫版上巻、64頁～65頁。

16. 松尾剛次・著『葬式仏教の誕生』平凡社新書、2011年。



©雁屋哲・花咲アキラ／小学館

図3

こうしたイメージは、江戸時代に入って檀家制度ができるとさらに強められていきます。檀家制度はもともとはキリシタン禁止に関わっています¹⁷が、多くの日本人が特定のお寺の檀家となって、そのお寺に葬式をしてもらうという側面をもっています。そのため何となく仏教は死を連想させて縁起が悪いというイメージがさらに強くなってきました。

おことわりをしておきますが、仏教は人間の生に深く関わっている宗教だと私は考えています。しかし先ほどの漫画や、今でもお坊さんが僧服を着ていると病院に入りづらいという話を聞くと、平安時代末期以降に生まれてくる「仏教は縁起が悪い」という考え方は、現代でも強固に生き残っていると感じます。

ここからが大事な点です。多くの日本人が仏教と神道に同時に関わっていることは間違いないのですが、無原則に関わっているのではなくて、一定のルールに従って使い分けていると私は考えてます。おめでたい時には仏教を持ち込んではいけない、人の死については神道が関わってはいけない。そして両者を混同してはいけないというルールが日本には、はっきりとあると思います。これが先ほど申し上げた隠れたルールです。このことは仏教式結婚式が少なくて、仏教による

17. 圭室文雄・著『葬式と檀家』吉川弘文館（歴史文化ライブラリー）、1999年。

葬式が圧倒的に多いということがよく示していると思います。ここには数百年続いてきた、日本人と宗教との関係がよく現れていると言ってよいでしょう。現代における宗教という日本語のイメージにあまりとらわれなければ、こうした日本人と宗教との関係が、視野に入ってくると思います。

(3) 日本の伝統的宗教と社会

でも、まだなぜ日本人はキリスト教を受け入れないのかという問題はわかりませんね。そこで最後に、日本の伝統的宗教と社会との話をいたします。この問題は、日本の伝統的な宗教、仏教と神道の社会的なあり方と関係していると私は考えています。

ここからは宗教社会学的な視点になります。先ほど申し上げたように、江戸時代に檀家制度が始まります。ただ今度のポイントは、葬式の問題ではなくて、日本人のほぼすべてが仏教寺院の檀家になったという点です。なにしろ神社の神主さんもお寺の檀家になるんです。もとはキリシタン禁止が主旨の制度でしたが、お寺はその人がキリシタンではないという証明を中心として、いろいろな証明書を発行する役

所のような役割をもつようになります。ですから江戸時代にお寺は激増します^{*18}。ある研究者は江戸時代にお寺の数が5倍になったと言っていますが、それほど増えます。お寺をめぐる景観は江戸時代に大きく変わるんですね。今のよういろいろな町や村のあちこちにお寺があるという景観は江戸時代に作られます。法隆寺や東大寺といった古代からある有名なお寺は、実は少数派なんです。

仏教への信仰をもたない人も、仏教寺院の檀家になるわけです。ならざるをえない。そういう社会制度になったわけですから。これはもちろん仏教を信仰する日本人が増えたということではない。信仰があらうがなからうが檀家にならなければならなかったのです。

つまり、江戸時代以降、仏教は宗教として、信仰としてではなくて社会制度として日本に広がっていきます。もちろん、仏教に対する深い信仰をもつ人もたくさんいたけれども、そういう人たちも含めて、制度として日本人は仏教寺院に関係をもたなければならなくなりました。神社については今日はお話しする時間がありませんでしたが、同じように社会に定着していきます。

このように伝統的なお寺や神社は、江戸時代から明治時代に日本の地域社会に深く根をおろすようになります。この地域社会に深く根を

おろすということが大事です。ある地域に生まれれば、必ず地域にあるお寺の檀家となり、地域にある神社の氏子となった。地域社会の人の側から見ると、生まれた時から信仰のあるなしに関係なく、自分の属するお寺とか神社が決まってるわけですね。そうすると、ある地域に生まれると家族や親戚と一緒にお盆の行事に参加したり、その地域のお祭りに地域の人と一緒に参加したりするのが普通になりました。宗教的な行事は年中行事や地域の行事といった社会的な行事と重なってくるんですね。これが宗教だとは考えないで、その地域の行事だと考えられるようになります。

このように、宗教と地域社会が結びつくと、その地域社会の人が新しい宗教に入るのは非常に難しくなります。新しい宗教に入るためには地域社会の人間関係から離脱しなければならない。もう生まれた時から檀家であったり、氏子であったりするんだけど、そういう関係から離れていかなければいけないわけで、単に仏教や神道の信仰をやめればいいという単純な話ではありません。その宗教の後ろにある地域社会との縁を切らなければなりません。

私は日本人がなかなかキリスト教徒にならない、あるいはなれないのはこうしたことが大きな理由だと考えています。つまり仏教や神道

18. 前にあげた『葬式と檀家』（圭室文雄・著）の80頁をご覧ください。

が地域社会と非常に深い結びつきをもってしまったために、信仰の問題というよりは、地域社会との関係がキリスト教に対するブレーキになっているというのが私の考えです。

以上のように考えるのが宗教社会学的な考え方です。つまり信仰ではなくて、宗教と地域社会との結びつきというものが、実はその人の宗教との関係を決めてるという考え方です。私はこうした考え方は、とてもおもしろいと思っています。

まとめです。以上のように、多くの日本人は自分たちが気がつかないところで宗教との関係や、宗教的な感覚、例えば隠れたルールとか、仏教は縁起が悪いといったイメージをもっていると思います。その宗教との関係や感覚は、歴史的な原因や社会的な原因によってもたらされていると考えています。

しかし、同時に「宗教」という日本語のイメージによってその関係や感覚は意識されない、隠されたものになっていると私は考えます。これは言葉のもたらす作用です。この作用のために、どんなに宗教に関係していても、どんなに宗教的な感覚をもっているても、自分たちは宗教に無関係、無関心、無頓着だと考えることができるのだと理解します。

このように宗教について考えようとする時には、まず私たちが、意識せずにもっている前提を意識化することが「第一歩」になると思います。

本日はご清聴どうもありがとうございました。



ヴェールから考える イスラーム^{注1}

荒木 亮（あらか・りょう）

宗教情報センター 専任研究員

◆1◆ ムスリムとヴェール

いま、日本のムスリム（イスラーム教徒）が増加している。現在は少なくとも20万人以上のムスリムが日本で暮らしていると言われている。約10万人と推計されていた2010年より2倍を超える人口となった。

こうした社会の変化を感じる一コマとして、日常の中でヴェールを着用したムスリマ（イスラーム教徒の女性）を見かけたり、さらには実

際に接する機会も増えてきたことが挙げられる。かつては、中東地域のイスラーム社会を取り上げたテレビ番組やニュースの映像を通じて垣間見るだけであった景色が、今ではインバウンドの興隆や在日ムスリムの増加を背景として、普段の何気ない場面でも出くわすものとなりつつある（写真1、2）。

ただし、ヴェール着用者に対する印象は必ずしもポジティブなものばかりではない。見慣れぬもののへの抵抗感なのか、ヴェールを着用して

頭髪を隠したり、さらには目と手の他の全ての身体を覆うニカーブと呼ばれる衣服を着用した姿に、えも言えぬ「不気味さ」を覚えた、という話を耳にすることもある。（写真3）
なぜムスリマはヴェールを着用するのか。その起源は『コーラン』の次の章句にある。^{注2}

これ、預言者、お前の妻たちにも、娘たちにも、また一般信徒の女たちにも、（人前に出る時は）必ず長衣で（頭から足まで）すっぽり体を包み込んで行くよう申しつけよ。こうすれば、誰だかすぐわかって、しかも害されずにすむ。

（第33章59節の一部）



写真1 都内のインドネシア料理店前にて
（筆者撮影）



写真2 都内の電車内にて
（被写体・本人たちによる提供）



写真3 ニカーブに身を包む女性
（didin wahyudi/Shutterstock.com [1686748501]）

こうした『コーラン』の章句を根拠に、現在では、顔と手首より先を除いた部分をムスリマは隠すべきである、という認識をムスリムは一般的に共有している。ただし、このヴェールの着用というイスラームないしはムスリムを象徴する宗教実践が現在のようなかたちでひろく履行されるようになったのは、じつは、ここ30〜40年くらいの出来事である。

◆2◆ 再ヴェール化とイスラーム復興

身体や顔を覆うことは、かつてよりムスリマにとっての宗教的な義務であった。ただし、ヴェール着用の背景や歴史はその一言に尽きるものではない。というのも、社会の近代化が進む19世紀末頃、中東地域ではヴェールの着用が後進性の象徴であるとして、内外の知識人層による批判の的となった。その結果、20世紀初頭

頃からヴェールの着用者が減り、例えばエジプトでは、1960年代に世界的な流行を受けてミニスカートを着用する者も新たに登場するなどいわゆる「脱ヴェール化」が見られていた。^{注3}

しかしこうした状況は、「イスラーム復興」が強調されるようになると一変する。「イスラーム復興」とは、「生活の中でイスラーム的と認識される象徴や行為が以前よりも顕在化し、ムスリムの生き方のさまざまな側面により影響を及ぼすようになる現象」である。^{注4}

イスラーム復興がムスリム社会で興隆する一つのきっかけとして、アラブ諸国とイスラエルとの対立によるパレスチナ問題が挙げられる。パレスチナでは土地を巡る争いが長らく続いてきたが、第三次中東戦争（1967年）においてエジプトやシリアを軸としたアラブ諸国の連合軍が、侵攻してきたイスラエル軍に大敗を喫した。その結果、イスラーム第三の聖地とされ^{注5}

る東エルサレム^{注6}、ならびにヨルダン川西岸やガザ地区がイスラエルに占領された。^{注7}

敗戦後のアラブ諸国では、閉塞感と屈辱感が社会に蔓延した。なにより、いわばユダヤ教の「宗教国家」であるイスラエルに敗れたという事実が大きなインパクトとなった。アラブ諸国のムスリムの間では、敗戦の原因を自己ないしは自分たちの社会における信仰心の低下に求める世論が形成されていった。その結果、アラブ社会の近代化を目指していた政治思想が後退し、自己および自分たちの社会のあるべき姿をイスラームを軸に考え直そうとする動きが生じた。すなわち、第三次中東戦争でのアラブ諸国の大敗が、国家や社会における信仰や宗教のあり方を再考するイスラーム復興の動きへとつながっていったのだ。

◆3◆ イスラーム復興のイメージと実情

ニュースで伝えられる、過激で暴力的な出来事が世間を賑わせてきたこともあり、日本社会ではイスラームに対して「怖い」というイメージを抱く者が多いように思える。しかし過激な思想の持ち主はごく限られている。多くのムスリムにとってイスラーム復興とは、日々の生活においてこれまで以上にイスラームの教えに沿っていかうとする機運の高まりであり、イスラームの教えに沿った宗教実践の顕在化であった。したがって、ムスリマの間で生じたヴェール着用者の増加は、こうしたイスラーム復興を示す象徴的な出来事と解することができる。

ただし時代が下るにつれて、ヴェールを着用する女性たちの服装は次第に消費文化に対応するようになる。端的に言えば、ファッション性が加味されたものへと変遷を遂げていった。そ

うしたことから、イスラーム復興における再ヴェール化という現象は、必ずしも自己の敬虔さや、信仰心の深化のみによって展開しているわけではないという見方もできる。

お洒落なイスラーム・ファッションの展開は、エジプトといったアラブ諸国に限らず、広くムスリム社会に見られる。そこで次に、イスラーム復興とヴェール化の展開について、世界最大のムスリム人口を抱える国家インドネシアを事例にその実情を覗いてみよう。

◆4◆ インドネシアのイスラーム復興とヴェール

人口2億7千万人のインドネシアでは国民の約87%がムスリムであり、その数は2億人を超える(写真4)。ただしインドネシアにおけるイスラームの戒律は、サウジアラビアやエジプト



写真4 金曜礼拝の様子
[ジャカルタのイスティクラル・モスクにて]
(筆者撮影)

といった中東地域のそれに比べてしばしば「ゆるい」と形容されてきた。というのも、聖地(サウジアラビアのメッカ)との物理的距離や、イスラームがこの地に伝播した時期(ムスリム商人による布教活動が遅くとも13世紀頃には既に展開されていたと言われるが、地域によって一様ではない)、またイスラーム化以前にはヒ

ンドゥー・仏教的な文化やアニミズム的な土着の信仰が社会に根付いていたという歴史的背景があるからだと言われている。

加えて、スハルト政権下(1966~1998年)ではヴェール着用に対する規制がかけられていたことにも注意する必要がある。スハルト大統領がイスラームの政治的な影響を警戒していた1980年代には、公立学校でヴェールを着用することは規制されており、免許証や身分証明書に使われる証明写真は、ヴェールを外した状態のものである必要があった。

しかし中東地域に端を発するイスラーム復興は、インドネシアにおいてもおおよそ1980年代に起こり始めた。その先駆けとなったのが大学生による宣教活動であり、イランのイスラーム革命(1979年)やエジプトで興隆したムスリム同胞団のイデオロギーを支えた著作が翻訳・出版されるようになった。また、それ

らを通じて、イスラームの教義や戒律に沿った社会改革的な思想が、都市のエリート層を中心とするインドネシアの大衆に浸透していくのである。その結果、人々はこれまで以上に『コーラン』の記述に基づいた、より「正しい」イスラームを日頃から意識して生活するようになった。

インドネシアではヴェールはアラビア語のヒジャーブ(hijab)、またはかつてより使われてきたジルバップ(jilbab)という言葉で親しまれている。1980年代後半から1990年代にかけて着用者が徐々に増加していったが、先述の通りスハルト政権下のヴェール着用に対する規制の関係で、実質的に着用が解禁になったのは1991年以降といわれている。^{注8}そして、こうした女性のヴェール着用の拡がり、インドネシアにおけるイスラーム復興の影響力を示す具体例と捉えられてきた。

◆5◆ ヴェール化のカラフルな展開

さて、2000年代に入るとインドネシアではカラフルなヴェールが街中で売買されるようになる。そして、ヴェール着用者を対象としたファッション誌の出版や、ヴェールを纏^{まと}ったム



写真5 イスラーム・ファッションを纏う女性たち [バンドゥンにて]
(筆者撮影)

スリマによるファッション・ショーの開催といったかたちでその審美性が追求されるようになった(写真5、6)。

こうした「イスラーム・ファッション(ムスリム・ファッション)」と呼ばれる、イスラーム服を着用したお洒落が拡大する一方、例えば襟元が大きくくりぬかれていたり、ブラウスの



写真6 イスラーム・ファッションを纏い自撮りする女性たち [バンドゥンにて]
(筆者撮影)

袖の部分が透けていたりするなど、厳格なムスリムからするとイスラーム的とは見做されない衣服も市場に並ぶようになった^{注9}。

ジャカルタなどで街行くヴェール着用者を眺めていると、地味目なものからお洒落でカラフルなものまで実に多様なコーディネートがあることに気づく。さらに、中にはボディラインが鮮明なものや、バストを強調した服装の者を見かけることもある。

お洒落を指向するイスラーム・ファッションに対して、批判的なムスリムもインドネシアには存在する。バストを強調した服装のムスリマを「ジルブツ (jilboobs)」と表現して批判する言説が2014年8月にインドネシアの世論を賑わせた。先述のようにインドネシアではヴェールを意味する言葉として古くからジルバツという表現が用いられているのだが、このジルバツ [jilbab] の語尾 [bab] を、

Ini Asal Muasal Istilah Jilboobs Beredar



画像1 ジルブツとされるムスリマの写真画像

(出典：Jadi Berita. Web. 14 Aug, 2014
[<http://jadiberita.com/37687/ini-asal-muasal-istilah-jilboobs-beredar.html> [最終閲覧日2014年9月28日]])

[boobs (おっぱい)]という意味の英語に置き替えたのが「ジルブツ」である。ヴェール(ジルバツ)を着用しながらも、実際にはバストを強調するようなムスリマの服装を、「それは『(ジル)バツ』ではなく『(ジル)ブツ』である」と批判や揶揄をする言説が流布したのだ^{注10}(画像1)。

イスラーム復興の影響力が増すなかで、インドネシアではヴェールの着用者の増加が見られた。しかし、宗教実践としてヴェールを着用するのみならず、そこにはファッション性を追求するという動機もあった。すなわち、わたしたちが巷で好みの服を選んだり、ファッション誌を見てそのコーディネートを考えるのと同じように、インドネシアのムスリマたちもヴェールの着用を通じて各々のお洒落をも楽しんでいるのだ。ただし、「ジルブツ」^{ちま}という批判的な言説の流布が示すように、イスラームという宗教の規則によって服装に制限があるということでは忘れるべきではない。

「お洒落」を指向するといった姿勢に着目すると、わたしたちとムスリマたちの日々の営みは、いわば地続きであるように感じられるが、宗教規則という点からは、両者は必ずしも同じではない。したがって、異文化を適切に理解す

るには共通性と差異性の双方に目を配る必要があるだろう。

◆6◆ イスラモフォビアに陥らないために

見知らぬものや相容れないことに対して恐怖心や嫌悪感、または差別意識を抱くことがある。さらにはそうした意識や感情が他者を排除する言動として表面化する場合もある。イスラームやその信者であるムスリムに対する嫌悪や偏見は、広くはイスラモフォビア（イスラーム恐怖症）と表現され、世界の様々な地域で問題視されている。

冒頭に述べたように、日本でもムスリムが増えつつある（写真7）。かれらムスリムは、日本でも基本的にはヴェールを着用する、豚肉を食べない、飲酒をしない、礼拝をする、定められた時期には断食をする、といった宗教実践を行



写真7 新大久保のイスラム横丁にて
(筆者撮影)

うだろう（もっとも、それは人それぞれであり、当然、そうしない者もいる）。日本社会に暮らしながらもヴェールを着用するというムスリマたちの「頑なさ」にイスラームという宗教の「厳しさ」を感じることに、ひいてはヴェールという女性のみに課された規則の「厳しさ」にイスラームという宗教が内包する「女性差別」や「女性への抑圧」を読み取る人もいるかもしれない。

しかしインドネシアの例で見たように、彼女たちのヴェール着用をイスラームの「厳しさ」という視点のみから理解することは適切ではなく、実際には多義的な行為であったことに留意されたい。イスラームに接するわたしたちが、フォビア（偏見や嫌悪）に陥らないためにも、まずは異文化や異宗教に対する知識や理解を深める必要があるのではないだろうか。

◆著者紹介

荒木 亮（あらかき・りょう）

1987年、三重県生まれ。東京都立大学人文科学研究所修士、博士（社会人類学）。インドネシア科学院・客員研究員、東京大学・特別研究員（日本学術振興会特別研究員P.D.）などを経て現職。専門は社会人類学、東南アジア島嶼部の宗教文化。主な著書に『現代インドネシアのイスラーム復興——都市と村落における宗教文化の混成性』（弘文堂、2022）など。

◆注

1. 一般的にはイスラム教、イスラム教徒という言葉が使われることが多いが、このレポートでは「イスラム教」を「イスラーム」と表記する。また「イスラム教徒」については、「イスラーム教徒」または「ムスリム」と表記（また一部は併記）している。加えて、イスラーム教徒（ムスリム）の女性については、文脈によっては「ムスリマ」と

記載している個所がある。

2. 他にもいくつかの章句が、ムスリマがヴェールを着用する際の根拠として参照されている。なおコーランの章句の引用は、井筒俊彦訳『コーラン（中）』岩波文庫（1958）による。またヴェールの着用については、後藤絵美『神のためにまとうヴェール——現代エジプトの女性とイスラーム』中央公論新社（2014）が詳しい。
3. この点は前掲の後藤（2014）の「11頁」および大塚和夫『イスラーム主義とは何か』岩波新書（2004）の「158～162頁」に依拠する。
4. 大塚和夫『イスラーム的——世界化時代の中で』講談社学術文庫（2015）の「159頁」から引用。
5. イスラームにとつての第一の聖地が、サウジアラビアのメッカであり、予言者であるムハンマドが生誕した場所である。また、メッカでの迫害を受けてムハンマドらが移住したメディナが第二の聖地である。
6. 東エルサレム（エルサレム旧市街）はムハンマドが昇天した地とされることから、イスラームに

を可決するなど、日本を含む国際社会の多くはこの宣言を認めることをしなかった。

7. こうした背景がある中、2018年5月14日、トランプ大統領下のアメリカ合衆国が駐イスラエル大使館を公式にエルサレムに移転した。この米大使館移転に対しては、国際社会から非難や、同地をめぐる対立の激化を懸念する声が挙がった。また実際にも、イスラエルとアメリカに対するパレスチナ側の抗議デモが発生し、イスラエル側の治安部隊と衝突するに至った。
8. インドネシアのヴェールについては、野中葉『インドネシアのムスリムファッション——なぜイスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』福村出版（2015）に詳しい。
9. この点は倉沢愛子『インドネシア——イスラームの覚醒』洋泉社（2006）の「200～203頁」に依拠する。
10. この点に関する詳細は、右記の拙著（2022）第3章を参照されたい。

7. とつての第三の聖地とされる。なお、ユダヤ教は、唯一神であるヤハウェを礼拝する神殿がかつてこの地にあったこと、さらにキリスト教では、かつてイエス・キリストが十字架にかけられ処刑された場所がこの地であることからそれぞれがこの土地を聖地としており、こうした背景からエルサレムがこれら三つの宗教にとつての聖地とされる。

1967年の第三次中東戦争の結果、イスラエルが東エルサレムを占領し、（1948年の第一次中東戦争以後、統治してきた西エルサレムと併せて）エルサレムの全域に対する実効支配を進めてきた。ただし、こうしたイスラエルの動きに対してイスラーム諸国を中心とした国際社会は反発をしてきた。

1980年7月、イスラエル政府は「エルサレム基本法」を制定し、東西を統一したエルサレムを首都とすることを宣言した。同時に、各国に対しては大使館をテルアビブから「首都のエルサレム」に移転することを求めた。対して、国連・安保理は同年8月にこの宣言を無効とする旨の決議

宗教情報データベースを公開

宗教情報センター（CIR）では、研究、調査のために、宗教関連記事の収集を行ってきました。この度、それに基づき宗教に関する新聞や雑誌の記事を収集した「宗教情報データベース」を公開することになりました。新聞や雑誌などで触れられる宗教に関する情報を横断的に検索することができる無料のサービスです。

記事の全文は法律上、公開できませんが、昨今の著作権法の改定（＊１）によって、検索ワードの前後約100文字を表示できるようになりました。限られた情報ながら、インターネット上の公開時期を過ぎた記事、また全国紙はもちろん地方紙や宗教専門紙に掲載された記事の検索が可能です。

アクセスの方法

以下のサイトから閲覧ください。

宗教情報データベース

<https://db.circam.jp/>



ご利用は
無料

インターネット接続が必要です。

特定のワードを入れて検索すると、宗教記事のタイトル、掲載紙誌名、刊行日、記事の文字数、CIRが独自に付す分類コード、記事の一部を確認することができます。記事の全文は発行元や図書館にてご確認ください。

宗教情報データベースβ版

検索したいワードを入力してください

検索

掲載日: 2024年4月1日 / 2ページ / 326文字 / 日本、日本の新宗教、神道、日本キリスト教、その他(国内)

比較思想学会 天理大で29、30日に大会「宗教文化」の公開シンポ 天理教

中外日報 / 2024年4月1日 / 2ページ / 326文字 / 日本、日本の新宗教、神道、日本キリスト教、その他(国内)

比較思想学会 天理大で29、30日に大会「宗教文化」の公開シンポ 天理教 比較思想学会の第51回大会が29～30日、奈良県天理市の天理大校之内町キャンパスで開かれる。

※全文をご覧になりたい方は発行元へお問い合わせください。

画像1 トップページ

随時、記事を登録しています！！

データベースへの反映のめやすは、紙誌の発刊より約1カ月程度です。昨今、宗教をめぐる議論が多く展開されているため、毎月約4000～5000件の情報が追加されています。現在は2019年から直近までのデータを公開しておりますが、それ以前の記事にもアクセスできる体制の整備に努めています。

宗教

検索

掲載日: 2024年4月1日 / 2ページ / 326文字 / 日本、日本の新宗教、神道、日本キリスト教、その他(国内)

比較思想学会 天理大で29、30日に大会「宗教文化」の公開シンポ 天理教

中外日報 / 2024年4月1日 / 2ページ / 326文字 / 日本、日本の新宗教、神道、日本キリスト教、その他(国内)

比較思想学会 天理大で29、30日に大会「宗教文化」の公開シンポ 天理教 比較思想学会の第51回大会が29～30日、奈良県天理市の天理大校之内町キャンパスで開かれる。

※全文をご覧になりたい方は発行元へお問い合わせください。

画像2 検索結果一覧の画面

修正にもご協力を

記事の登録漏れや、登録データに誤字が残っている場合があります。検索結果の一覧から記事をクリックすると、末尾に「誤字等のご指摘」というリンクがありますので、お気づきの際はお知らせください。

比較思想学会 天理大で29、30日に大会「宗教文化」の公開シンポ 天理教

中外日報 / 2024年4月1日 / 2ページ / 326文字 / 日本、日本の新宗教、神道、日本キリスト教、その他(国内)

比較思想学会 天理大で29、30日に大会「宗教文化」の公開シンポ 天理教 比較思想学会の第51回大会が29～30日、奈良県天理市の天理大校之内町キャンパスで開かれる。

※全文をご覧になりたい方は発行元へお問い合わせください。

画像3 検索結果の記事詳細画面

使い方のヒントは随時お知らせ

システムの特長や活用例などを、サイト上で随時ご案内していく予定です。

＊１：著作権法改正の要点については、文化庁のホームページをご参照ください。
<https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/hokaisei/>（2024年7月11日確認）

実は
おもしろい!



金 毘 羅 神 社

地図を見ると、立川市の北の方に「金毘羅橋」という橋があります。玉川上水にかかる橋です。よく見ると近くに金毘羅山と金毘羅神社があることがわかります。

四国の金毘羅様（現・金刀比羅宮）は、海の神として有名ですが、海から離れている立川に、なぜ金毘羅神社があるのでしょうか。

実はこの金毘羅神社については、立川市が出している『新編立川市史』に詳しい説明があります。ただ、いつ建てられたか、なぜ建てられたかは諸説があり完全にはわかっていないようです。

この近くには巴河岸跡ともえがしがあり、そこは明治三年から二年間だけ、玉川上水が新宿方面への船運に使われていた時期の船着き場でした。こうした船の往来に金毘羅神社が関係したかもしれないという説もあります。

わからないことも多いのですが、宗教を出発点にして、土地の歴史を考えてみるのも楽しいことではないでしょうか。宗教には土地の歴史が刻み込まれているという面があるからです。

編集後記

▼私たちは、宗教にまつわる情報を研究者はもちろん、広く一般の方々にもお届けすることに取り組んでいます。『CIRレポート』を読み、「宗教はおもしろい」と感じていただけたらうれしい限りです。(H) ▼皆でモノを作るのとても楽しい作業でした。この冊子が皆さまにとって宗教をより深く考えていただく一助になりましたら幸いです。(S) ▼「日本でもよくムスリムを見かけるようになった」「なぜお寺で結婚式を上げる人が少ないの?」「ファブリーズで除霊ができるらしい」など、世間を賑わす(おもしろい)宗教情報を今後も発信していきます!(A) ▼『CIRレポート』はCIR研究員がまとめましたが、デザインやレイアウトは印刷会社の明誠企画さんに大変お世話になりました。皆で作った冊子です。お楽しみいただけるとうれしいです。(F)

お知らせ

第2回立川文化セミナーを

2025年2月16日に開催する予定です。

詳細は後日、宗教情報センター(CIR)のサイトに掲載します。

CIR レポート Vol.1 2024.11

2024年11月15日発行

発行 宗教情報センター

〒190-0013 東京都立川市富士見町5-1-7
ファーストビル1階

URL <https://www.circam.jp>

印刷 明誠企画株式会社

※本誌掲載の内容の無断複製・転載・複写・翻訳を禁じます。
©2024 The Center for Information on Religion. Printed in Japan.

- 『立川市史』でおもしろそうなところをさがしてみたら? 情報が豊富です
- 「多摩てばこネット」(<https://www.tamatebakonet.jp/town/history/>) もおもしろいですよ。

